

「2007年の三重県の経済見通し」について

三重県内の経済について、地域別や業種別には業況に格差がみられる状況ではあるが、2007年の見通しは、減速しつつも景気拡大が続くと思われる。

ただし、景気拡大へのポイントは、企業収益の家計への分配が進み、消費拡大につなげることができるかどうか、また、生産活動や設備投資への影響が大きいアメリカ経済が大きく落ち込むことなく、景気拡大を続けることができるかどうかといえる。

現在の景気拡大は、これまでの景気拡大時と比べると、経済成長率は低水準となっており、景気拡大の実感が伴わないといわれている。三重県においても、2006年の個別の経済指標をみると、主要業種である自動車や電子部品、情報通信機器などの生産活動は増加し、雇用情勢も全国的にも良好であったが、一方で、消費関連の指標は足踏みが続き、消費者物価は落ち着いて推移した。

三重県の経済は安定成長期にあり、2007年についても製造業が牽引役となって景気拡大が続くとみられるが、消費の拡大が待たれるところである。

* (参考) 日本の景気拡大

	時 期	期 間
現在の景気(進行中)	02年2月～	11月で「いざなぎ景気」と並んだ
いざなぎ景気	65年11月～70年7月	4年9か月
バブル景気	86年12月～91年2月	4年3か月

* ポイント

- ・ いざなぎ景気に比べると、今回の景気拡大は、回復と停滞の小さな調整を繰り返すことで、粘り強い景気となっている。
- ・ 息の長い景気拡大となっている背景として、企業が3つの過剰(人、負債、設備)を整理でき、粘り強い体質に変わったこと、グローバル化の中で国際競争力を高めることができたことなどをあげることができる。
- ・ しかし、景気拡大の実感が乏しい背景として、いざなぎ景気に比べて、今回は低成長であること、賃金が伸びず、家計への波及が遅れていること、業種や地域、個人、企業における景況感のバラツキ、格差をあげることができる。
- ・ 景気拡大のスピードは減速トレンドになる。その要因として、製造業において輸出減速の影響が出てくること、賃金が上昇せず、家計への波及テンポが緩やかであることをあげることができる。2007年の見通しは、景気拡大は続くが、そのスピードは低下するとみられる。
- ・ こうした中、日本銀行の利上げがどのタイミングで実施されるかが、当面の注目点になっている。

*2007年の注目点

景気拡大

緩やかに減速しながらも息の長い拡大を続けることができるか。

個人消費

雇用・所得環境の改善を支えに本格回復できるかどうか。

物価

消費者物価が緩やかに上昇していくのかどうか。

地価はどうなるか

三大都市圏で上昇基調が鮮明になってきたが、地方都市に波及できるかどうか。

為替レート

日米の金利差縮小で、円高傾向に向かうのか。

金利

日銀はどのタイミングで引き上げ、その後も再々引き上げがあるのかどうか。

原油価格

先行き落ち着くのか、あるいは高騰するのかどうか。

米国経済

安定成長を続けることができるかどうか。